



賢いはたらき方のススメ🕒

押尾コータローさん

アコースティックギターの多彩な音色と卓越した演奏で聴く人を魅了する、ギタリストの押尾コータローさん（以下、押尾さん）。ギタリストとしての演奏技術はもちろんずば抜けているが、お客さまにいかに受け入れられ、そしてそれに必要な技術をいかに習得するのかを常に考え、行動する。「ギタリストは寡黙に演奏する」というイメージを払拭し、お客様本位のギタリストとして、ビジネス価値を大いに高めた先駆者といえる。ビジネスパーソンにとってもたいへん参考になる押尾さんのギタリストとしての「はたらき方」について、その「熱い想い」を聞いた。

助言は素直に聞き入れ、現状でのベストを尽くす

— 唯一無二の演奏テクニックから、ギターに夢中な少年時代であっただろうと想像しますが、まず音楽との出会いからお聞かせください。

始まりは、幼少時代の鼻歌です。いつも、前奏部分から忠実に歌い始めるので、母が「そこから？」と突っ込みを入れていました（笑）。とはいえ、野球選手やサッカー選手に憧れるふつうの子どもでしたよ。

音楽を始めたきっかけは中学の部活。トランペットがかっこいいと思ってプラスバンドに入ったのですが、体格がよかったせいでバス・チューバという、やたら大きな楽器を渡されてしまった。バス・チューバはベースの役割ですから、ボン、ボン、ボンと低い音を奏でる地味なパートなんです。どんな曲を演奏しても、やることはほとんど一緒に思えて。合奏して初めて「こんな曲やったんか！」と分かるんです（笑）。



そんな中、休憩時間にふと部室で聴いた、フォークギターの弾き語りには衝撃を受けました。「歌と演奏がたった一人で完結している！ギターってすごい！」って（笑）。それがギターとの出会いでした。

— では、最初はフォークソングの弾き語りから？

長渕剛さんが僕の憧れでした。プラスバンドと並行して独学でギターを覚え、けっこう弾けるという自負もありました。高校へ進学してフォークソング部に誘われましたが、一度は断ったんです。「独学で弾けるようになったし、わざわざ部活でやらなくても」という生意気な理由で。ところが「まあそう言わずに」と引き止められて先輩たちの演奏を見たら、めちゃくちゃうまくて、かっこよくて。思わず「入部します！」と即答していました。そこからずっとギター小僧ですね。

— 音楽大学への進学も考えられたそうですが。

今思うと本当に世間知らずでした。ピアノを習ったこともないのに音大に入れるわけがない。無謀だったかもしれませんが、本気でした。そこからは独学で音楽理論を徹底的に学び、絶対音感を身につけたくて、音叉（※）を肌身離さず持って、来る日も来る日も「ラー」と絶対音感を身につけるための訓練をしていました。（※「音叉」は音の絶対音を決める道具で、現在は「ラ」に当たる440ヘルツが一般的）

— 何にしる、目の前のことに一生懸命に取り組まれるんですね。

「今、自分にできること」を頑張れなかったら、何事も成し遂げられないと思っているんです。アルバイトをするにしても、本業じゃないからと適当にやるのではなく、給料をもらうからには真面目に取り組みたい。「これしかやらない」という執着は、あまりないかもしれません。人の助言もわりと素直に聞き入れますね。何事に対しても「もっとよくするには、どうすればいいか」という視点で考えるほうなので、よかれと思うことはとりあえずやってみます。

プロを目指すなら、めげないことも一つの才能

— 高校を卒業した頃には、もう音楽の道でプロになるという意識があったのでしょうか？

そうですね。高校2年の時に、師匠である中川イサトさん（以下、イサトさん）のギター教室に通い始めたんです。イサトさんは『赤い風船』の元ギタリストで、関西フォークの草分け的存在。イサトさんが出された教則本も完璧にマスターして門を叩きました。ところが、イサトさんはすでに、全く新しい奏法を取り入れていたんです。以前はブンチャ、ブンチャ、とリズムを刻むラグタイムギターのような弾き方だったのが、ギターのチューニングをブンブン変えて、バーンと弦を叩くような斬新な奏法で、今までとは違う次元の、いわゆるニューエイジミュージックとかヒーリングミュージックの走りともいえる音楽でした。イサトさんの音楽は、インストゥルメンタルとの出会いでもありました。アコースティックのギター演奏だけで、こんなにかっこいいことができるのかと、のめり込みました。

— 押尾さんの多彩なギターサウンドの原点ですね。

イサトさんと出会ったことが人生の節目となりました。師匠でありアイドルでもあります。その後、東京の音楽専門学校に通うようになったのですが、東京に行くならということで、イサトさんが岡崎倫典さんを紹介してくれました。倫典さんは当時からギターインストゥルメンタルの楽曲をたくさん作られていて、イサトさんと同じくパイオニア的な存在でした。東京に行った頃は、周りからも「ギターうまいね」と言われるようになり、ギターを弾くのが楽しくて、楽しくて。でも倫典さんからは「モノを作る人になれ」と言われていました。というのも僕は人の曲のコピーばかり演奏していて、オリジナル曲がありませんでした。でも楽しかったし、それでいいじゃないかと思っていました。

そんな折りに、ひょんなことからバンドを組むことになり「バンドで成功したい!」と思うようになって、作曲をする必要に迫られたわけです。ボーカルが歌詞を書いて僕が曲を作る。すると、あろうことかその作業がおもしろくて。倫典さんの言っていた「モノを作る人になれ」とはこういうことかと、ようやく理解できました。倫典さんは、新しいものを生み出すという感覚、そして既存の曲に似ていたとしても、コピーではない自分のオリジナルを作り出すことの大切さを、僕に実感してほしかったのだらうと思います。次々とデモテープを作り、レコード会社に送りまくった時期でした。

— バンドデビューを目指していたとは、ちょっと意外です。

でも、実はその時にやっていたのはギターではなくベースです（笑）。他にベースをやる人がいなかったからですが、その時はギターかベースかというこだわりは特になく、バンドをやることに夢中でした。20歳から27歳まで、ずっとそんなことを続けていました。鳴かず飛ばず、でしたけど。ライブのチケットが売れなくて自分たちで買い取るような、赤字バンドでした。

30歳に近づくと周囲のバンド仲間からも、辞めたり解散したりという話が聞こえ始めました。そういうことが重なると、ふつうは迷ってへこみますよ、バンドマンも。ところが僕はちっとも不安に思わなかった。根拠のない自信というか、音楽で食べていきたいという情熱だけは人一倍強かったのでしょうか。

— 音楽の道しか考えられなかったんですね。

就職するなら、その職業で骨を埋めたいタイプなんです。就職して音楽を続けるとなると、どちらも中途半端になってしまう。だから30歳になっても、もうちょっと音楽で頑張りたいと思っていた。いい年になっても、へこたれず不安にもならなかったことが、一つの才能かもしれませんね。



「わかるやつだけわかればいい」では、人がついてこない

— 現在の押尾さんの演奏スタイルは「本当にギター1本？」と耳を疑うくらい、アップテンポからバラードまで曲調は幅広く、まるで複数の楽器で演奏しているかのような変化に富んだ音色に驚かされます。このスタイルはどのようにして築き上げられたのでしょうか？

バンドが解散してから、原点であるアコースティックギタリストとして、他のミュージシャンのライブやレコーディングに参加するなど、仕事の声がかかるようになりました。カントリーロック調にしたいロックバンドや、タンゴのバンド、アイリッシュバンドなど、アコースティックギターはわりと需要があったんです。

そうした経験を積む中で、ミュージシャンとしての姿勢をいろいろと考える機会も生まれました。ミュージシャンの中には「わかるやつだけわかればいい、俺たちはやりたい音楽をやる」という硬派なタイプもいます。しかし、お客さんが誰もついてこなければチケットも売れません。やはりお客さんあっての世界ですから、それは違うんじゃないかと思ったんです。独自のスタイルを貫きつつ、お客さんが求めるものに応えられるギタリストになりたいと僕は思うんです。

— お客さんの目線で考えることも必要ということですね。

サポートギタリストとしての活動の合間に、ソロギターのライブ活動もマイペースで始めていました。いろいろなバンドが出演するイベントに出ると、バンドは音圧があってサウンドに迫力があるし、女の子からキャーキャー言われている。盛り上がっていいな、と客席を見ていると、お目当てのバンドが終わったら、お客さんがぞろぞろと退場していくんですよ。「これはまずい！次が出番なのに！」と慌てました。普通に出て行って「押尾コータローです、聴いてください。ポロローン」なんてアコースティックギターを弾き始めても、地味すぎて間違いなく全員が帰ってしまう。「わかるやつだけ」なんて言っていられないわけです(笑)。どうしたら聴いてもらえるか必死で考えて知恵をしまりました。

下積みを楽しむこと。そこからプロへの道が開ける

— どうやってお客さんをひきつけようかと探求された結果、自由自在にギターを弾きこなす独自のスタイルができあがったというわけですね。

一人でも多くのお客さんに来ていただきたいし、「押尾コータローっていいよね」と言ってもらいたくて、どうしたら聴いてもらえるか、どうしたら楽しんでもらえるか、常に考えて工夫しています。ギタリストは媚びずに黙々と弾くのがかっこいいと言う人もいますが、聴いてもらうには、やはりお客さんとのコミュニケーションが大事だと思うんですよ。

偉大なミュージシャンである故・河島英五さんから、貴重なアドバイスをいただきました。「インストゥルメンタルの演奏で曲名だけ紹介して弾いたって、何も伝わらない。曲に対する思いを少しでも話してから弾けば、その言葉が歌詞の代わりになる」と言われて、実践するようになりました。歌がない曲に言葉を添えると、聴く人の心に情景が見えてくる。すると、音楽の感じ方も変わるんです。

— そうした押尾さんの姿勢がファンにも観客にも伝わっています。コンサートは、会場が本当に一体となっていて、全力で押尾さんの音楽を、この時間を味わおうという気持ちであふれていました。

ありがとうという気持ちしかありません。「つらい時に押尾さんの曲を聴いて、気持ちが軽くなった。ありがとう」などとお手紙をいただくことがあるのですが、そんな時は僕のほうこそ、ありがとうという気持ちになります。音楽を続けてきてよかったと心から思います。



賢いはたらき方のススメ ㊤

— 若い世代の方々に「働くこと」に対するメッセージを送るとするとどのようなことですか。

少し急ぎすぎるかな、という気はします。今すぐギタリストになりたい、今すぐデザイナーになりたい、今すぐトップに立ちたい…。下積みばかりしろと言うつもりはないのですが、雑用で学べることはたくさんあるんですよ。「自分がやりたいのはこんな仕事じゃない!」と突っぱねるのではなく、ベストを尽くして取り組むと見えてくることがあります。考えて工夫することを楽しんでほしいですね。

もちろん、技術や才能は磨いておかなければなりません、それだけでは、いつ日の目を見るかわかりません。やはりチャンスを与えるのは先輩や上の方々ですし、彼らの信頼を得られれば、大抜擢の可能性もあるわけです。使い走りのエキスパートになってやる、くらいの気持ちで目の前の仕事に向き合えば、相当使える人材になれるはずなんです。

相手の要望にきちんと応えられると、お互い気分がいいし、つまりはそれが「いい仕事をする」ということですよね。どんな仕事にも通じることで、すし、「働くこと」とはそういうことだと思います。

取材後記

押尾さんは関西出身。ギタリストという肩書きからも寡黙で気難しいのか、と思いきや、取材中は関西弁のギャグを交えて笑わせて下さる。ギターの世界に新しい扉を開き、全国を巡るコンサートツアーのチケットを手に入れるのも難しいというのに、サービス精神に富み一つひとつ誠意をもって対応してくれた。押尾さん自身はそんな表現は決してしていないが、「自分の道を開くには、才能にあぐらをかかず、一生懸命に取り組むこと」だと、しっかり押尾さんに教わった。

プロフィール

押尾コータロー（おしお・こーたろー）

2002年アコースティックギタリストとしてメジャーデビューし、同年10月に全米メジャーデビューを果たす。スイスの「モントルージャズフェスティバル」へは2002年から3年連続出演。近年ではアジア各地での活動も拡げ、韓国や中国でのソロライブを開催するなど海外での評価も高い。オープンチューニングやタッピング奏法などのテクニックを駆使し、1本のギターで弾いているとは思えない鮮やかで迫力あるギターアレンジや、あたたかく繊細なギタープレイは世代を超えて多くの人々に支持を受けている。ライブ活動を中心に映画音楽やCM音楽の作曲を手掛けるなど活動の幅を広げ、2017年は、メジャーデビュー15周年を記念して全国47都道府県ツアー50公演を開催した。

<http://www.kotaro-oshio.com/>

